

# ソ連朝日新聞

伯國市マニラ  
カレン街一〇〇ナ  
發行所  
ソ連朝日新聞社  
本紙定額年六千五百  
外紙郵費共百廿五

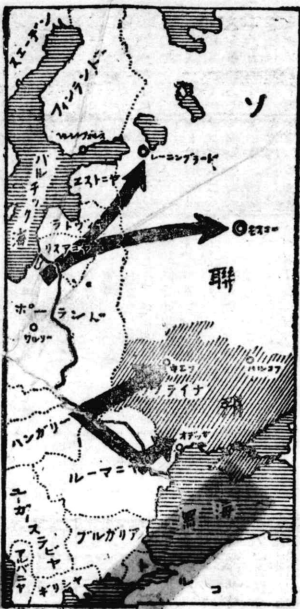
レコードは  
コロムビア時代

## 獨軍完勝の電撃線!

### 赤色ライン脆くも敗れ

#### ソ聯軍全面的に大潰亂 首都モスクワ正に風前の燈

(ベルリン十三日同盟) 獨軍はスターリン線への進撃を開始するとともに作戦經過を一切發表せず沈黙を守つて来たが、ついに全線に亘つてこれが突破に成功し先遣部隊は早くもキエフ、レニングラードに向け猛進撃をつづけてあり、兩都市の陥落も目途に迫つた、スターリン線中最も防備の堅固な要衝ビテブク、(ミンスク北東方二百三十キロ)も十一日以來獨軍の手に陥ちたので、歐露におけるソ聯最後の防備線は完全に獨軍精銳に蹂躪され、モスクワまでは全く防備線のない坦々たる自動車道が通じてゐるだけに過ぎず首都モスクワの陥落も時日の問題である



### 要衝を次々突破し

#### キエフ、グランドに肉迫

##### 獨總統々監部の發表

(ベルリン十二日同盟) 獨軍はスターリン線を突破し、キエフ、グランドに肉迫し、要衝を次々突破し、ソ聯軍は全面的に大潰亂を喫つてゐる、獨軍はスターリン線中最も防備の堅固な要衝ビテブク、(ミンスク北東方二百三十キロ)も十一日以來獨軍の手に陥ちたので、歐露におけるソ聯最後の防備線は完全に獨軍精銳に蹂躪され、モスクワまでは全く防備線のない坦々たる自動車道が通じてゐるだけに過ぎず首都モスクワの陥落も時日の問題である

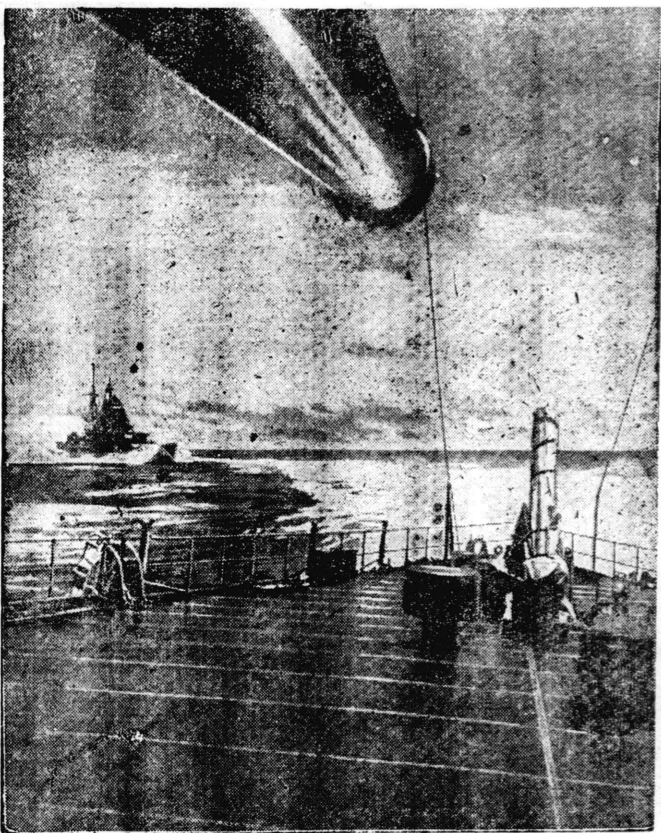


校將女の軍赤聯ソ

Uma "oficiala" do exercito vermelho

### 波高き太平洋の護り

波高き太平洋の護り わが海の精銳



スターリン線に肉迫した

### ビルマ公路改善へ

#### 米軍用トラック二千台 近く専門工も派遣か

(ワシントン十三日同盟) ユーロピアン・タイムズ紙が、ビルマ公路の改善に米軍が積極的に関与してゐると報じてゐる、米軍は約二千台のトラックを、ビルマ公路の改善に用ゐるとし、近く専門工も派遣する、米軍はビルマ公路の改善に積極的に関与してゐると報じてゐる、米軍は約二千台のトラックを、ビルマ公路の改善に用ゐるとし、近く専門工も派遣する

### 重慶、英米と結託

#### わが南洋經濟の攪亂企つ 華僑中心に企業公司設立

(バンコック十三日同盟) 當をシガポールに各支店を設け、南洋經濟の攪亂を企てる、華僑中心に企業公司設立、南洋經濟の攪亂を企てる、華僑中心に企業公司設立

### 英ソ軍事同盟結ぶ

#### 單獨休戦を防止、抗戦強化へ

(ロンドン十三日UP) 本報が英ソ兩國間に軍事同盟締結されたが、その内容は左の如くである、ソ連政府はナチス獨逸に對する現狀に對して、英ソ兩國間に軍事同盟締結されたが、その内容は左の如くである

### 英佛休戦交渉へ

(ワシントン十二日同盟) ユーロピアン・タイムズ紙が、英佛兩國間に休戦交渉が行はれてゐると報じてゐる、英佛兩國間は休戦交渉を行はれてゐると報じてゐる

#### 營業不振で

米米銀行の不振、米米銀行の不振、米米銀行の不振

### 帝國不動の國策

#### 戦時特色愈よ濃化 總力戦體制の整備成る

(東京十四日同盟) 帝國は戦時特色愈よ濃化し、總力戦體制の整備成る、帝國は戦時特色愈よ濃化し、總力戦體制の整備成る

### 國共合作を強化

#### 反極軸戦線支持の氣勢 中共委員力味返る

(香港十四日同盟) 重慶電、國共合作を強化し、反極軸戦線支持の氣勢、中共委員力味返る

### 佛印向け輸出代行社

#### 更に廿九社決る

(東京十四日同盟) 佛印向け輸出代行社、更に廿九社決る、佛印向け輸出代行社、更に廿九社決る

### タイ、佛印國境確定

#### 泰側委員の顔觸れ決る

(バンコック十三日同盟) タイ、佛印國境確定、泰側委員の顔觸れ決る

### 周財政部長

(南京十四日同盟) 周財政部長、空路南京へ歸着

### 鈴木元長氏

(東京十四日同盟) 鈴木元長氏、豫備陸軍中將



### 俄然強氣に出た棉!

#### 棉屋さん達も面喰ふ 一擧五ミル方の奔騰

だが結局 投機筋の買煽りか

手持ち棉屋が自國棉を國內消費用として、保蔵し、海外輸出を見合はせる方針をとる旨、傳へられてからの折、それを裏書きするかの如く、最近イギリスより二十万担、更にイギリス及びアメリカより三十万担、合わせて六十万担の州棉買付の注文があり、そのために先上りを見越した投機筋が俄然強氣になり、棉の相場は急激に暴落した。これは、棉屋さん達も面喰ふ一擧五ミル方の奔騰を來した。だが結局、投機筋の買煽りか、と見られる。

### りつた上もり上

手持ち棉屋が自國棉を國內消費用として、保蔵し、海外輸出を見合はせる方針をとる旨、傳へられてからの折、それを裏書きするかの如く、最近イギリスより二十万担、更にイギリス及びアメリカより三十万担、合わせて六十万担の州棉買付の注文があり、そのために先上りを見越した投機筋が俄然強氣になり、棉の相場は急激に暴落した。これは、棉屋さん達も面喰ふ一擧五ミル方の奔騰を來した。だが結局、投機筋の買煽りか、と見られる。

### 早魃に加え降霜

#### 悲運に泣く農家 奥モヂアナの慘狀

此の度のセツカは五十年來の最悪の年である。六月には、降霜もあつた。農家は、早魃と降霜の連続で、大に苦しんで居る。奥モヂアナの農家は、特に悲惨な状態に陥つて居る。

### どほ人いな少の汗

#### 熱帯で活躍出来る 今後の植民へ興味の研究發表

此程東大醫學部講堂で開かれた日本學術協會主催の帝國學士院自然科學部研究發表會で、古原大教授が「熱帯の植民」を發表した。古原氏は、熱帯の植民は、生理學的から汗分泌の多いか、少いかの體質は、同時に熱帯に耐へるか、どうかを判り、將來熱帯地へ移住する者の適否を決定するに興味ある報告をした。

#### 朝の卓食

朝の卓食は、健康に好ましい。朝食は一日の活動のエネルギーを供給する重要な役割を果たす。朝食を摂らない人は、健康状態が悪化する可能性がある。

### ！現實夢の年永

#### 汎米道路の完成近し ブエノスから紐育へドライブ

汎米道路の建設は、新しき意義を付するもので、成の計で、丁度この年は汎米道路の完成に近づく。ブエノスアイレスから紐育へドライブが可能になる。これは、南米と北米の間の交通を促進し、経済的発展を促す重要なステップである。

#### ウルグワキ政府の 非友好的な態度

#### リオ各紙一齊に攻撃

ウルグワキ政府の非友好的な態度は、リオ各紙に激しく攻撃された。政府の政策は、国民の利益を損なうと見られて居る。各紙は、政府の行動を厳しく批判し、国民の支持を求めた。

#### 見えざる敵と戦ふ

#### 北米で第五列襲撃演習

北米で第五列襲撃演習が行われた。演習は、北米防衛の強化と、潜在的な脅威への対応を目的とした。演習は、高度な技術と協力を要するもので、防衛力の向上に貢献した。

#### ル大統領も悩む

#### 米國名物の小兒麻疹

米國名物の小兒麻疹は、ル大統領も悩む。麻疹は、小兒に多い感染症で、予防接種が重要である。大統領は、国民の健康を守るために、適切な対策を講じる必要がある。

#### 北巴魁の球戦

#### カンバラ支部豫選大會

北巴魁の球戦は、カンバラ支部豫選大會で盛り上がった。選手たちは、高いモチベーションで試合に臨み、観客も大いに盛り上がった。この大会は、地域のスポーツ文化を促進する重要な機会となった。

#### 躍進亞國水上界

#### 八百米に新記録

八百米に新記録が樹立された。選手は、驚異的なスピードでゴールを駆け抜け、観客も大いに感動した。この記録は、選手の実力とトレーニングの成果を示している。

#### 海外雜音

海外のニュースや雑音に関する記事。包括的な国際情勢の分析や、特定の地域の出来事に関する情報を提供する。読者は、世界の動向を把握することができる。

#### 本日學醫・石流

#### 小兒麻疹の注意

小兒麻疹の注意。麻疹は、小兒に多い感染症で、予防接種が重要である。親親は、子供の健康を守るために、適切な対策を講じる必要がある。

#### 海外雜音

海外のニュースや雑音に関する記事。包括的な国際情勢の分析や、特定の地域の出来事に関する情報を提供する。読者は、世界の動向を把握することができる。

#### 海外雜音

海外のニュースや雑音に関する記事。包括的な国際情勢の分析や、特定の地域の出来事に関する情報を提供する。読者は、世界の動向を把握することができる。

#### 海外雜音

海外のニュースや雑音に関する記事。包括的な国際情勢の分析や、特定の地域の出来事に関する情報を提供する。読者は、世界の動向を把握することができる。

#### 海外雜音

海外のニュースや雑音に関する記事。包括的な国際情勢の分析や、特定の地域の出来事に関する情報を提供する。読者は、世界の動向を把握することができる。

### 主婦のメモ

#### 今週の食料品公定價

市統計課發表、本月十一日より食料品公定價は次の通りである。

ブドウ	上	1,200
ブドウ	中	1,000
ブドウ	下	800
ブドウ	特上	1,500
ブドウ	特	1,300
ブドウ	上	1,100
ブドウ	中	900
ブドウ	下	700
ブドウ	特上	1,400
ブドウ	特	1,200
ブドウ	上	1,000
ブドウ	中	800
ブドウ	下	600
ブドウ	特上	1,300
ブドウ	特	1,100
ブドウ	上	900
ブドウ	中	700
ブドウ	下	500
ブドウ	特上	1,200
ブドウ	特	1,000
ブドウ	上	800
ブドウ	中	600
ブドウ	下	400
ブドウ	特上	1,100
ブドウ	特	900
ブドウ	上	700
ブドウ	中	500
ブドウ	下	300

### 主婦のメモ

#### 今週の食料品公定價

市統計課發表、本月十一日より食料品公定價は次の通りである。

ブドウ	上	1,200
ブドウ	中	1,000
ブドウ	下	800
ブドウ	特上	1,500
ブドウ	特	1,300
ブドウ	上	1,100
ブドウ	中	900
ブドウ	下	700
ブドウ	特上	1,400
ブドウ	特	1,200
ブドウ	上	1,000
ブドウ	中	800
ブドウ	下	600
ブドウ	特上	1,300
ブドウ	特	1,100
ブドウ	上	900
ブドウ	中	700
ブドウ	下	500
ブドウ	特上	1,200
ブドウ	特	1,000
ブドウ	上	800
ブドウ	中	600
ブドウ	下	400
ブドウ	特上	1,100
ブドウ	特	900
ブドウ	上	700
ブドウ	中	500
ブドウ	下	300

### 主婦のメモ

#### 今週の食料品公定價

市統計課發表、本月十一日より食料品公定價は次の通りである。

ブドウ	上	1,200
ブドウ	中	1,000
ブドウ	下	800
ブドウ	特上	1,500
ブドウ	特	1,300
ブドウ	上	1,100
ブドウ	中	900
ブドウ	下	700
ブドウ	特上	1,400
ブドウ	特	1,200
ブドウ	上	1,000
ブドウ	中	800
ブドウ	下	600
ブドウ	特上	1,300
ブドウ	特	1,100
ブドウ	上	900
ブドウ	中	700
ブドウ	下	500
ブドウ	特上	1,200
ブドウ	特	1,000
ブドウ	上	800
ブドウ	中	600
ブドウ	下	400
ブドウ	特上	1,100
ブドウ	特	900
ブドウ	上	700
ブドウ	中	500
ブドウ	下	300

### 主婦のメモ

#### 今週の食料品公定價

市統計課發表、本月十一日より食料品公定價は次の通りである。

ブドウ	上	1,200
ブドウ	中	1,000
ブドウ	下	800
ブドウ	特上	1,500
ブドウ	特	1,300
ブドウ	上	1,100
ブドウ	中	900
ブドウ	下	700
ブドウ	特上	1,400
ブドウ	特	1,200
ブドウ	上	1,000
ブドウ	中	800
ブドウ	下	600
ブドウ	特上	1,300
ブドウ	特	1,100
ブドウ	上	900
ブドウ	中	700
ブドウ	下	500
ブドウ	特上	1,200
ブドウ	特	1,000
ブドウ	上	800
ブドウ	中	600
ブドウ	下	400
ブドウ	特上	1,100
ブドウ	特	900
ブドウ	上	700
ブドウ	中	500
ブドウ	下	300

### 主婦のメモ

#### 今週の食料品公定價

市統計課發表、本月十一日より食料品公定價は次の通りである。

ブドウ	上	1,200
ブドウ	中	1,000
ブドウ	下	800
ブドウ	特上	1,500
ブドウ	特	1,300
ブドウ	上	1,100
ブドウ	中	900
ブドウ	下	700
ブドウ	特上	1,400
ブドウ	特	1,200
ブドウ	上	1,000
ブドウ	中	800
ブドウ	下	600
ブドウ	特上	1,300
ブドウ	特	1,100
ブドウ	上	900
ブドウ	中	700
ブドウ	下	500
ブドウ	特上	1,200
ブドウ	特	1,000
ブドウ	上	800
ブドウ	中	600
ブドウ	下	400
ブドウ	特上	1,100
ブドウ	特	900
ブドウ	上	700
ブドウ	中	500
ブドウ	下	300

### 主婦のメモ

#### 今週の食料品公定價

市統計課發表、本月十一日より食料品公定價は次の通りである。

ブドウ	上	1,200
ブドウ	中	1,000
ブドウ	下	800
ブドウ	特上	1,500
ブドウ	特	1,300
ブドウ	上	1,100
ブドウ	中	900
ブドウ	下	700
ブドウ	特上	1,400
ブドウ	特	1,200
ブドウ	上	1,000
ブドウ	中	800
ブドウ	下	600
ブドウ	特上	1,300
ブドウ	特	1,100
ブドウ	上	900
ブドウ	中	700
ブドウ	下	500
ブドウ	特上	1,200
ブドウ	特	1,000
ブドウ	上	800
ブドウ	中	600
ブドウ	下	400
ブドウ	特上	1,100
ブドウ	特	900
ブドウ	上	700
ブドウ	中	500
ブドウ	下	300

### 主婦のメモ

#### 今週の食料品公定價

市統計課發表、本月十一日より食料品公定價は次の通りである。

ブドウ	上	1,200
ブドウ	中	1,000
ブドウ	下	800
ブドウ	特上	1,500
ブドウ	特	1,300
ブドウ	上	1,100
ブドウ	中	900
ブドウ	下	700
ブドウ	特上	1,400
ブドウ	特	1,200
ブドウ	上	1,000
ブドウ	中	800
ブドウ	下	600
ブドウ	特上	1,300
ブドウ	特	1,100
ブドウ	上	900
ブドウ	中	700
ブドウ	下	500
ブドウ	特上	1,200
ブドウ	特	1,000
ブドウ	上	800
ブドウ	中	600
ブドウ	下	400
ブドウ	特上	1,100
ブドウ	特	900
ブドウ	上	700
ブドウ	中	500
ブドウ	下	300

### 大坂商船 發着廣告

パナマ	西	八月十七日
パナマ	西	八月十八日
パナマ	西	八月十九日
パナマ	西	八月二十日
パナマ	西	八月二十一日
パナマ	西	八月二十二日
パナマ	西	八月二十三日
パナマ	西	八月二十四日
パナマ	西	八月二十五日
パナマ	西	八月二十六日
パナマ	西	八月二十七日
パナマ	西	八月二十八日
パナマ	西	八月二十九日
パナマ	西	八月三十日
パナマ	西	八月三十一日

### 水口鮮魚店

祝儀、婚禮、其他の鮮魚一切 各地方へ送荷致します

水口鮮魚店

水口、水口、水口

### 自の魂

自の魂

自の魂、自の魂

自の魂、自の魂

### 東山印骨粉

東山印骨粉

東山印骨粉、東山印骨粉

東山印骨粉、東山印骨粉



## Os alemães transpuseram a linha "Stalin"

### Retiram-se as tropas soviéticas em toda a linha — As forças germânicas aproximam-se de Kiev — Dominada a rede ferroviária soviética — As perdas soviéticas e alemãs segundo se noticia em Moscou

BERLIM, 12 (D.) — Comunicado do Departamento de Informações das forças germânicas:

- 1.0 — As forças germânicas transpuseram os pontos principais da linha "Stalin";
- 2.0 — As forças teuto-rumanas que avançam da região de Mordaba, atacaram os soviéticos numa linha de grande extensão. As forças soviéticas retiraram-

- 3.0 — As forças aliadas germano-húngaro-solavacas estão procedendo a operações de limpeza dos remanescentes da região de Galícia;
- 4.0 — As forças germânicas que operam nas regiões do norte do rio Dniester aproximam-se de Kiev;
- 5.0 — Foram transpostas as posições inimigas situadas ao

longo do rio Dnieper, ao norte da baía de Pripet;

- 6.0 — A frente germânica acha-se a 200 kms. ao norte de Minsk;
- 7.0 — Os inimigos começam a demonstrar desinteligências, com possibilidades de dissidência;
- 8.0 — As forças germânicas ocuparam Bilepsk;
- 9.0 — Os alemães que avançam a leste de Pelpusk acham-

se próximos a Leningrado;

- 10.0 — As forças germânicas dominaram já toda a rede ferroviária soviética, tornando assim impossível aos soviéticos, qualquer plano de grandes operações.
- 11.0 — As forças motorizadas alemãs avançam nas regiões da linha "Stalin".

BERLIM, 13 (D.) — O exército alemão, desde que iniciou o seu ataque à linha "Stalin", não

deu mais à publicidade nenhum comunicado de guerra. Já conseguiu, entretanto, romper essa linha em toda a frente. As vanguardas já estão avançando com direção a Kiev e Leningrado, sendo esperada a queda dessas cidades de um momento para outro. Os pontos mais fortificados que são Bibusk e Bitesk (230 quilômetros ao norte de Minsk), também se encontram em poder das forças alemãs des-

de o dia 11. Toda a defesa da Rússia Européia foi esmagada e agora até Moscou só existem estradas de rodagem sem ne-

áculo, de maneira que a questão de horas a vela capital.

#### PERDAS ALEMÃS E SOVIÉTICAS

MOSCOU, 13 (D.) — Segundo se noticia nesta capital, são as seguintes as perdas de ambas as partes:

- 1.0 — Perdas em homens: — U. R. S. S. — 250 mil; Alemanha — 1 milhão.
- 2.0 — Forças motorizadas: — U. R. S. S. 2.200; Alemanha — 3.000.
- 3.0 — Aviação: — U. R. S. S. — 1.900; Alemanha — 2.300.

## A orientação do governo imperial em face da atual situação mundial

### A EXECUÇÃO INTEGRAL DA LEI DE MOBILIZAÇÃO GERAL

TOKYO, 14 (D.) — O governo japonês decidiu a sua atitude definitiva na última Conferência Imperial, realizada a 2 do corrente. Nessa Conferência, sob a suprema presidência de S. M. o Imperador, o governo resolveu fortalecer, em todos os sentidos, a organização interna do país, afim de fazer face à violenta convulsão mundial deste momento.

- 1.0 — Execução dos pontos principais da política nacional;
- 2.0 — Execução integral da lei de mobilização geral.

Tendo por objetivo estes pontos fundamentais da política nacional o governo está adian-

tando os necessários preparativos. Toda a política japonesa está assim orientada para a preparação da nação no tempo de guerra. Governo e povo unidos, marcharão para a construção de um regime de defesa nacional. Explicando o melhor:

- 1.0 — Na reunião do gabinete realizada no dia 10 do corrente, ficaram assentadas as políticas fundamentais da economia para a formação do regime do tempo de guerra. E ainda as orientações fundamentais sobre a nova divisão administrativa do território nacional, sobre a formação do regime econômico do tempo de guerra, o regime de

trabalho, a política demográfica, o sistema de comunicações e transportes, a orientação do desenvolvimento científico e técnico, já entraram em fase de execução. Quanto ao regime econômico, o governo está apressando a formação de uma companhia de controle das principais indústrias. No que concerne à política financeira, o governo está dividindo em diretrizes referentes a novas leis e a lei de mobilização geral;

- 2.0 — A lei de mobilização geral foi fortalecida na última sessão da Dieta Municipal, adquirindo um caráter de lei de

plenos poderes. Assim, com a aplicação dessa lei, o regime nacional será fortalecido.

- 2.0 — O plano de mobilização material, para enfrentar a rápida transformação da situação internacional, foi estabelecido na reunião do gabinete do dia 9 e a orientação para organizar o orçamento do exercício vindouro foi estabelecida na reunião ministerial do dia 8.

Organizando todo o país, de maneira a estar preparado para qualquer emergência, o governo está decidido, a marchar firmemente na execução do seu desideratum.

### Nomeadas duas comissões na Tailândia para a execução do acordo de fronteira

Bangkok, 13 (D.) — O governo de Tai publicou hoje listas dos nomes que compõem a comissão de demarcação de fronteira e a comissão de recepção do território anexado a Tailândia.

### Novas firmas exportadoras para a Indochina

Tokyo, 14 (D.) — A Companhia de Comércio dos Mares do Sul publicou, há tempos, a lista de 95 companhias e m o direito de exportação para a Indochina Francesa. Hoje publicou uma lista com mais 29 firmas, com a devida autorização do ministro de Comércio e Indústria.

### FALECIMENTO DE UM GENERAL

TOKYO, 14 (D.) — Faleceu hoje, na sua residência de Itabashi, o tenente-general Motonaga Suzuki, com a idade de 58 anos.

O extinto ocupou os cargos de comandante da defesa da ilha de Boko, chefe da engenharia do exército, comandante da defesa da baía de Tokyo, etc.

Passou para a reserva no ano de 1937. Era autoridade em matéria de telegrafia sem fio e engenharia militar.

## O AUXILIO NORTE-AMERICANO A CHINA

### DECLARAÇÕES DE UM TÉCNICO EM MATÉRIA DE TRANSPORTES

WASHINGTON, 13 (D.) — Ao que noticia um telegrama de Chungking para o "New York Times", os três técnicos em transportes enviados pelos Estados Unidos, chegaram naquela capital no dia 12, procedente de Hong-Kong. Os referidos técnicos permanecerão cerca de um mês na China, para realizar estudos das rotas chinesas. Depois regressarão a Washington para apresentar seus relatórios ao sr. Early, assistente do presidente Roosevelt, sobre a situação dos transportes na China.

Um dos técnicos sr. Davis, fez a seguinte declaração:

"O governo norte-americano adquiriu 2.000 caminhões de capacidade de 2 toneladas e meia para fornecer à China, de acordo com a lei de auxílios.

Dentro de alguns meses serão ainda enviados cerca de 30 operários especializados em automóveis à China, para melhorar a estrada de Birma".

O dr. Arthur Young, conselheiro do governo de Chungking reassumiu o seu posto hoje, regressando de Washington.

## Organizada uma companhia para colaborar com a Inglaterra

### A mesma trabalhará para que materias primas não sejam fornecidas ao Japão

BANGKOK, 13 (D.) — Notícias fidedignas aqui recebidas informam que o governo de Chungking está dispendendo todos os esforços para impedir a execução dos planos econômicos japoneses dos mares do Sul.

Para isso consta que os poderes de Chungking, com o auxílio anglo-norte-americano, resolveram organizar um bloco econômico constituído pelas maiores companhias chinesas estabelecidas nos países dos

mares do Sul. Esse bloco terá a sua sede em Singapura e serão estabelecidas filiais em Saigon, Bangkok, Manila, Rangoon e Hong-Kong. Consta que em Hong-Kong já foi iniciada a sua atividade.

O capital dessa organização é de 50 milhões de dólares e tem íntima ligação com o ministro da Economia de Guerra da Inglaterra e procurará evitar que a borracha, estanho e outros produtos do Tai, Indochina, Ilhas Holandesas, Maláia, etc.

## OS COMUNISTAS CHINESES PRECONIZAM O FORTALECIMENTO DA FRENTE CONTRA O "EIXO"

HONG-KONG, 14 (D.) — Segundo um telegrama de Chungking, a comissão central do partido comunista chinês está preconizando a execução dos seguintes pontos:

- 1.0 — Apoio à frente contra o "eixo" e fortalecimento da frente anglo-americano-russo-chinesa.
- 2.0 — Remodelação da política interna, especialmente repressão às especulações dos negociantes, demissão de funcionários desonestos, melhoria na instrução dos soldados.
- 3.0 — Fortalecimento da política de cooperação entre o partido nacionalista de Chungking e o Comunista.

Nessa declaração, os comunistas negam que eles estejam organizando um exército vermelho, independente do exército nacionalista. Reitera a sua decisão de agir de acordo com o partido nacionalista para lutar contra o Japão.

## Em negociações a paz franco-britânica

### Suspensas as operações

VICHY, 12 (D.) — O governo de Vichy deu à publicidade o seguinte comunicado oficial sobre o início das conversações do tratado de armistício da guerra da Síria:

dante das forças francesas está negociando a paz com os poderes britânicos".

"O governo de Vichy resolveu negociar a paz com o governo britânico. As operações foram suspensas ao meio dia de hoje. O comandante das forças francesas não sejam cedidos às firmas japonesas e fornecer à Inglaterra e Estados Unidos. Merece atenção como uma política de colaboração entre a Inglaterra e Chungking.

### Chegou a Nankin o ministro das Finanças do governo nacional chinês

NANKIN, 14 (D.) — O ministro das Finanças do governo de Nankin que esteve em visita ao Japão chegou hoje às 9.40 horas da manhã a esta capital.

## Firmada a aliança militar entre Inglaterra e U. R. S. S.

### O TEXTO DO ACORDO

LONDRES, 13 (U. P.) — O texto do acordo anglo-soviético, redigido em russo e em inglês e publicado simultaneamente em Moscou e em Londres, diz o seguinte:

"O governo da União das Repúblicas socialistas do Soviet e o governo de S. Majestade britânica do Reino Unido chegaram ao presente acordo e declaram o seguinte:

"Primeiro. — Os dois governos se obrigam, mutuamente, a prestar entre si ajuda e apoio de todo gênero, na guerra atual contra a Alemanha hitlerista.

"Segundo. — Obrigam-se ainda, durante a guerra, a não negociar, nem concluir nenhum armistício de paz salvo de comum acordo.

"As partes contratantes estabelecem que este acordo entre em vigor no momento de sua assinatura e que não fique sujeito a ratificação".

MADRID, 14 (U. P.) — Em meio a calorosa demonstração de simpatia da população madrileña, partiram ontem à noite para a frente oriental, afim de lutar contra os russos, novos contingentes de voluntários espanhóis.

Durante a cerimônia de despedida, na "gare" de embarque, foram ouvidos pelo rádio discursos pronunciados pelos srs. Serano Suñer, Muñoz Grande e outros chefes do falangismo peninsular.

## Discurso do sr. Churchill

LONDRES, 14 (U. P.) — Em seu discurso pronunciado hoje, perante seis mil operários da defesa, o primeiro ministro britânico, sr. Winston Churchill, advertiu a nação que era iminente outra ofensiva aérea contra as Ilhas Britânicas, declarando, porém, que a ofensiva da aviação britânica contra o Reich tem sido muito mais intensa que a efetuada pela "Luftwaffe" contra Londres. Em seguida acrescentou:

"Continuaremos o processo e com crescente ritmo, até que tenhamos destruído essa grande tirania". O sr. Churchill advertiu, depois, os seis mil operários que se deve esperar o renício da ofensiva aérea alemã contra a Inglaterra, dentro em breve. Manifestou também que "haveis terminado seus rudes combates, mas é possível que de um momento para outro entreis em outros. Momentaneamente, produziu-se uma trégua, porém, devemos esperar que em breve o inimigo reinicie seus ataques contra nós".

Proseguindo em sua oração, o primeiro ministro declarou que o valor demonstrado pelos londrineses em circunstâncias sumamente difíceis "não somente nos permitiu sair airosos do que muitos acreditaram ser um terrível perigo, como também causou uma profunda impressão em todos os países e nos conseguiu muitos milhões de amigos nos Estados Unidos".

O sr. Churchill acrescentou que não titubeava em declarar que o enorme progresso registrado nos Estados Unidos, para fazer com que sua contribuição à resistência britânica seja mais eficiente, se devia em grande parte à conduta dos londrineses, como também dos homens e mulheres das cidades provinciais. Salientou ainda que, apesar do fato de que algumas das forças de Hitler se encontrarem afastadas, "atacando a vida e os direitos de outro vasto ramo da família humana, a Alemanha ainda tem forças muito poderosas à mão. Se a "Luftwaffe" não tem visitado ultimamente Londres, não há dúvida de que não é porque nos queria mais".

### "BLITZKRIEG" CONTRA A ITALIA

LONDRES, 14 (U. P.) — Urgente. — A certa altura do seu discurso proferido hoje, o primeiro ministro britânico, sr. Winston Churchill, declarou que dentro em breve será iniciada a "blitzkrieg" aérea contra a Itália.

### Será fechado um banco de Canton

CANTON, 14 (D.) — A filial do National City Bank de Canton vai suspender suas operações nesta cidade e se transferir junto à filial de Hong-Kong.

### Para facilitar o mútuo conhecimento dos povos continentais

MEXICO, 14 (U. P.) — Os diplomatas latino-americanos acreditados junto ao governo mexicano assistiram à audição da "Hora Nacional" auspiciada pelo Ministério do Interior. Durante a transmissão, fez uso da palavra o dr. Alfonso Flores, que propôs a criação de uma união inter-parlamentar americana, para facilitar "o mútuo conhecimento dos povos continentais, eliminar as discórdias e defender a dignidade e a liberdade humanas".

O noticiário telegráfico publicado pelo "BRASIL ASAHI" é fornecido pelas agências: "Federal" (A. M.) brasileira; "Econ" (D.), japonesa; "United Press" (U. P.), norte-americana; "Transocean" (T.O.), alemã.

### Novos contingentes de voluntários espanhóis partiram para a frente oriental

MADRID, 14 (U. P.) — Em meio a calorosa demonstração de simpatia da população madrileña, partiram ontem à noite para a frente oriental, afim de lutar contra os russos, novos contingentes de voluntários espanhóis.

Durante a cerimônia de despedida, na "gare" de embarque, foram ouvidos pelo rádio discursos pronunciados pelos srs. Serano Suñer, Muñoz Grande e outros chefes do falangismo peninsular.

# A QUESTÃO DE LIMITES ENTRE O PERÚ E O EQUADOR

## Recapitulação histórica do conflito — As atividades das chancelarias da América do Sul — Notas diversas — Aceita pelo Equador a mediação

Por iniciativa do Brasil, dos Estados Unidos e da Argentina, vai, agora, intensa atividade, em todas as chancelarias da América do Sul. Tal atividade se relaciona intimamente com o novo surto agora verificado do problema de limites entre o Peru e o Equador, problema este que, ainda há poucos dias, deu origem a conflitos armados entre militares das duas nações referidas.

Seja em consequência do fato de a atenção geral se haver voltado quasi que inteiramente para as notícias a respeito da marcha da conflagração europeia, ou seja por qualquer outra circunstância, a questão entre os governos de Lima e de Quito não vem sendo considerada, pelo público, em sua devida importância; trata-se, entretanto, de problema de alta transcendência, pois da sua solução definitiva decorrerá mais um fator em prol da permanência da paz em nosso continente.

Para que os leitores formem uma idéia precisa da índole da pendência entre o Peru e o Equador, vamos apresentar, em breves linhas, o resumo histórico do problema, com a objetividade que em tais circunstâncias se faz mister.

De início, digamos que o Peru se constituiu em nação soberana em 1821, reunindo, em sua geografia, territórios de antigas províncias coloniais, entre os quais figuraram os de Jaén e de Maynas. Estas províncias se proclamaram peruanas por ato espontâneo de seus "conselhos municipais", naquele tempo denominados "cabildos capitales". O Equador, por sua vez, se constituiu em nação independente em 1830, sendo que os representantes de Jaén e de Maynas não estiveram presentes ao congresso que proclamou a independência equatoriana, exatamente porque tais províncias se haviam espontaneamente integrado na nação peruana.

A questão de fronteiras surgiu mais tarde, quando foi preciso traçar o limite entre as províncias que, em 1821, se integraram no Peru, e as que, em 1830, votaram por sua união ao Equador. Da questão resultou o acordo de 1832, entre os governos de Lima e de Quito, que reconheceu o "statu-quo" possessorio.

Em 1841, entretanto, o Equador achou oportuno reclamar, do Peru, então agitado por convulsões internas, a posse das províncias referidas de Jaén e de Maynas. A reclamação deu origem a longas negociações diplomáticas que solucionaram, em parte, a pendência, no ano de 1853; com efeito, o Equador limitou-se, depois, a formular algumas reservas apenas quanto à região banhada pelos rios Maranhão, Amazonas e seus afluentes.

Em 1857, o Equador quis dispor da região de Alto Pastaza, também denominada Canelos, para fazer uma concessão em pagamento de uma sua dívida à Inglaterra; o Peru protestou contra isso, por estarem os territórios todos dentro dos limites de Maynas. A questão de fronteiras voltou à baila, permanecendo na ordem do dia durante cerca de trinta anos. Em 1887, este problema se circunscreveu à delimitação de fronteiras do norte da província de Maynas, para o estabelecimento da legitimidade da concessão equatoriana aos seus credores ingleses.

Nesse mesmo ano de 1887, firmou-se uma convenção entre os governos de Lima e de Quito, convenção esta que determinou o princípio da arbitragem para a solução do problema. Escolheu-se, para árbitro, o rei da Espanha. No processo arbitral, fez-se uso de outros dispositivos da convenção, de que resultou um projeto de tratado que foi aprovado pelo Congresso do Equador em 1890, e desaprovado

pelo Peru em 1891. Em 1894, concordou-se com a realização de uma conferência tripartite entre o Peru, o Equador e a Colômbia. Desta conferência resultou um pacto que foi aprovado pelos Congressos da Colômbia e do Peru, não o sendo, porém, pelo Congresso do Equador, que não se pronunciou a respeito.

Renovou-se, a seguir, o acordo para a arbitragem do rei da Espanha, devido à insistência do Peru, nesse sentido; os "considerandos" do laudo arbitral foram favoráveis ao governo peruano. Antes de ser expedido o laudo, o Equador, que dele teve conhecimento, manifestou-se contrário à decisão, dando origem a uma situação que quasi chegou a ser de guerra entre os governos de Lima e de Quito. A gravidade da situação se dissipou com a mediação tripartite do Brasil, dos Estados Unidos e da Argentina; os mediadores propuseram uma fórmula de harmonia e conciliação, que foi repelida pelo Equador. O governo de Quito, então, exigiu o abandono do processo arbitral e preferiu adotar o método das negociações diretas com o Peru.

A essa altura, os mediadores, ou seja, o Brasil, os Estados Uni-

dos e a Argentina, propuseram fosse a questão submetida, pelos interessados, à apreciação do Tribunal de Haia. O Peru aceitou a sugestão. O Equador recusou-se a isso, persistindo no seu desejo de negociações diretas.

Em 1913, o Peru, propôs, ao Equador, a chamada "fórmula mixta", que constituiu a base do protocolo de 1924, dentro de cujas normas se realizaram as negociações de Washington, de 1938, que também não conduziram a resultados definitivos.

Em 1940, a situação se resumia no seguinte: — As aspirações territoriais equatorianas envolviam uma reivindicação de províncias que formavam (e ainda formam) parte do Peru, desde a constituição deste país em nação soberana, ou seja, desde 1821, e, portanto, nove anos antes que o Equador proclamasse a sua independência. Considerava o Peru que as aspirações equatorianas eram incompatíveis com a soberania do governo de Lima não se tendo negado, porém, nunca, nem às negociações diretas, nem à solução arbitral da pendência. Ademais, o Peru julgava que cabia ao Equador a responsabilidade pela situação presente, pois foi o governo de Quito que deixou

de aceitar a sentença que estava para ser pronunciada pelo rei da Espanha em 1910, além de ter deixado de aceitar o conselho de mediação do Brasil, dos Estados Unidos e da Argentina, para apresentar o litígio ao pronunciamento do Tribunal de Haia.

E' neste pé que se encontra a pendência entre o Peru e o Equador, pendência esta que serviu de fundo ao incidente militar de fronteira de poucos dias atrás, e que agora movimenta as chancelarias do nosso continente.

Para as negociações relativas à questão, os representantes dos dois países interessados, ao que informam os telegramas chegaram ontem a Washington".

**Aceita pelo Equador a mediação**

QUITO, 12 (U. P.) — Anuncia-se oficialmente que o Equador aceitou a proposta de 9 de Julho, para resolver o conflito fronteiriço com o Peru. ("Correio Paulistano", 14-7-41)

# Congresso de Algodão em Memphis

## DECLARAÇÕES DO DR. GARIBALDI DANTAS — AS TESES DO CONGRESSO — NOVAS APLICAÇÕES DO ALGODÃO — A QUESTÃO DE TRANSPORTES

O sr. Getúlio Vargas, presidente da República, designou por ato de 10 do corrente, para fazer parte da delegação brasileira ao Congresso de Algodão, a instalar-se na cidade de Memphis, no Estado de Tennessee, nos Estados Unidos, o sr. Garibaldi Dantas, chefe do Serviço de Economia Rural em São Paulo.

O conhecido técnico em assuntos algodoeiros falou à Agência Nacional sobre os pontos mais palpitantes a serem debatidos no importante certame, assim se expressando:

— "Tive conhecimento, pelos jornais da honrosa incumbência que me confiou o sr. presidente da República, para fazer parte da delegação brasileira ao Congresso de Memphis, a inaugurar-se em Outubro próximo futuro.

Quando estive nos Estados Unidos, em Abril deste ano, acompanhei os trabalhos preliminares da organização desse importante certame. Nessa ocasião fui consultado pelo nosso governo sobre a oportunidade da nossa representação ao referido Congresso. Opinei favoravelmente, lembrando, entretanto, ao governo, a necessidade de figurarem, na representação nacional, elementos das nossas associações de classe e dos principais Estados produtores. Assim opinei porque o referido Congresso vai abordar uma grande variedade de assuntos, desde a produção até o comércio exterior.

Conforme foi divulgado, esse congresso não tocará em questões que só podem ser resolvidas de governo para governo, tais como: limitação de produção e quotas de exportação, assuntos esses, aliás, já entregues à consideração do Comitê Pan-Americano de Washington. Com isso

o Congresso de Memphis poderá atuar com maior liberdade de ação. Se o Brasil levar a esse certame uma representação escolhida, sobre o que não tenho dúvidas, tiraremos vantagens especiais.

**AS TESES DO CONGRESSO**

— "O Congresso abordará teses interessantes. Haverá um dia inteiramente dedicado à produção. Aos delegados será proporcionada uma visita às grandes lavouras de algodão, a fim de mostrar-lhes o que se faz nos EE. UU., na parte agrícola propriamente dita.

Outro dia será consagrado à inspeção do serviço de beneficiamento, devendo ser visitados os magníficos laboratórios, dessa especialidade, mantidos pelo Ministério da Agricultura daquele país.

As grandes prensas de algodão, os trabalhos de exportação e de carregamentos nos portos serão, também, objeto de metódica inspeção. Haverá, ainda, visitas aos novos laboratórios de tecnologia de fibras de algodão instalados no sul do país, um dos quais custou cerca de 2 milhões de dólares.

Os estudos das questões comerciais de interesse continental, terão especial destaque.

**NOVAS APLICAÇÕES DO ALGODÃO**

— "Não menos interessante será o que os delegados presenciarem no terreno das novas aplicações do algodão. O governo americano tem um vasto programa de intensificação de consumo interno e que vai desenvolver vigorosamente. Dessa maneira, atenuará a gravidade da situação geral, hoje tão prejudicada pela falta de exportação.

Nesse setor de novos usos, os delegados brasileiros, poderão trazer — a meu ver — ótimas sugestões que serão de possível aplicação no nosso meio.

**A QUESTÃO DO TRANSPORTE**

— "A parte dos transportes, que é o assunto mais palpitante do momento, será ventilada no Congresso. Há mesmo um movimento, em vários países americanos, de compra das so-

bras não exportadas, medida de grande alcance e oportunidade para atenuar as dificuldades de mercado. No momento, o transporte para algodão brasileiro ainda não atingiu a fase crítica que, em Abril, todos julgavam inevitável.

Temos tido vapores suficientes para carregar, até agora, o dobro do que vendíamos em anos anteriores. Isso não implica, entretanto, em solução da questão dos transportes.

**SOB O ALTO PATROCÍNIO DO GOVERNO AMERICANO**

— "Estou, apenas, dando as linhas gerais do Congresso, tais como me foram apresentadas, em Abril deste ano, nos EE. UU. Desconheço, entretanto, se daquela data até hoje, foram introduzidas outras modificações. De qualquer maneira a presença de representantes do Brasil, tal como foi aprovada pelo presidente da República, será de grande utilidade para os nossos meios algodoeiros.

Convém acentuar que o Congresso de Memphis não é oficial. Foi organizado por associações particulares dessa cidade e é um dos grandes centros algodoeiros do país.

O governo norte-americano resolveu, entretanto, patrocinar esse certame, a fim de que a ele pudessem comparecer, em caráter oficial, representações de todas as nações americanas interessadas no algodão".

# O GENERAL GÓES MONTEIRO NA ARGENTINA

## Declarações deste ilustre militar

BUENOS AIRES, 12 (T. O.) — Falando à agência "Transocean", o general Góes Monteiro fez as seguintes declarações:

"Sinto-me altamente honrado com as sucessivas distinções de que fui alvo, por parte do povo argentino. A minha missão é simplesmente de representante militar em Buenos Aires, por ocasião das comemorações nacionais argentinas. Esta visita não só aumentará as fraternais relações existentes entre ambos os exércitos, como conduzirá a resultados práticos em futuro próximo, pois da maior vinculação e conhecimento nasce a verdadeira união entre os povos. Aos países de origem espanhola — se bem que o Brasil tenha suas raízes no nobre povo de Portugal — não se pode negar que entre este e a Espanha exista uma vinculação de gênese — não de consolidar suas relações e já os governos orientam a sua política internacional nesse sentido, marcando rumos práticos.

Os mercados do Brasil e da Argentina podem completar-se e se constituir em forte baluarte de economia latino-americana. Nada existe entre ambos os povos que signifiquem no tocante aos mercados entrecruques econômicos. Com a produção do Brasil pode-se fazer um intercâmbio de benefícios inegáveis. Quanto às indústrias, o mesmo fenômeno se verifica. O desfile militar de 9 de Julho foi impecável. As forças do ar, do mar e de terra argentinas expostas à observação e crítica

na. Sem dúvida as forças aéreas realizam neste momento progressos militares importantíssimos, porém, não se pode basear o poderio militar apenas nesta arma, especialmente na América. As 3 armas básicas, o Exército, a Aviação e a Marinha, completam-se e se encontram unidas de tal forma que não se pode jogá-las separadamente como elemento de poderio. A Argentina tem motivos de orgulho do seu exército, da sua marinha e de sua aviação".

# "Dicionário dos animais do Brasil"

## A Diretoria de Publicidade Agrícola da Secretária da Agricultura vem de editar uma das obras científicas mais completas de Rodolfo Von Ihering

Perdeu o Brasil, e particularmente São Paulo, não faz muito tempo, uma das maiores envergaduras de cientista e de pesquisador: Rodolfo von Ihering. Radicado, já havia muitos anos, em nossa terra, serviu-a com proficiência, nobreza, e uma rara noção do verdadeiro apostolado científico. Escritor, amante da natureza, observador minucioso e honesto dos fenômenos biológicos, em vários setores de nossa vida persistem traços inapagáveis de seu esforço e de seu trabalho fecundo.

Como redator-técnico da Diretoria de Publicidade Agrícola de nossa Secretária da Agricultura, Von Ihering exerceu profícua atividade, seja como cientista, seja como divulgador. A

imprensa paulista está repleta de contribuições suas, cada uma das quais valiosa e cheia de ensinamentos úteis. Em São Paulo, foi ele, no dizer de Mário de Sampaio Ferraz, o verdadeiro precursor da piscicultura moderna. Mais tarde, no Instituto Biológico, e em outros cargos e comissões de saliência, revelou-se sempre um valor incontestável.

O Brasil, Von Ihering amou-o sem reservas honrando-o em seu campo de atuação, mercê de sua comprovada cultura científica.

A Diretoria de Publicidade Agrícola de nosso Estado vem, agora, homenageando-o, de publicar o seu tão apreciado "Dicionário dos Animais do Brasil", obra ímpar em nosso país pela

vastidão das informações que contém e pela esfera enorme de estudos por ela abrangida.

O trabalho, feito com o capricho, o esmero e o cuidado peculiares a todos os empreendimentos a que se abalança a Diretoria, constitui uma prova a mais de sua utilidade e da importância de sua atuação em nossa ambiência e em nosso meio.

**A "RAF" atacou objetivos industriais do noroeste da Alemanha**

LONDRES, 14 (U. P.) — O Ministério da Aeronáutica expediu hoje o seguinte comunicado:

"A Royal Air Force atacou, no decorrer da noite passada, os objetivos industriais numa vasta zona do noroeste da Alemanha, especialmente em Bremen e Vegesack. Amsterdam e Ostende também foram bombardeadas. Em Roterdam, também irromperam incêndios nos depósitos de petróleo. Foram bombardeados, ademais, os aeródromos do norte da França. Falta um de nossos aviões".

A contribuição da colônia japonesa em prol dos flagelados gauchos

RIO, 12 (A. N.) — Conforme noticiamos, os jornais que se editam em língua japonesa no Estado de São Paulo, solidários com o movimento de afeto da população do país para com as populações sul-riograndenses atingidas pelas enchentes, promoveram entre os seus leitores uma coleta destinada a angariar donativos que pudessem minorar os sofrimentos desses nossos patriotas, tão rudemente atingidos. Essa coleta vem de ser encerrada, atingindo o seu total a importância de réis 103:742\$100.

# Auxílio da população carioca aos flagelados gauchos

RIO, 12 (A. N.) — A Sociedade Sul Rio Grandense, que desde o período agudo das enchentes no Rio Grande do Sul até hoje vem recebendo nesta capital, donativos para as vítimas do flagelo das águas naquele Estado, já remeteu ao interventor

Cordeiro de Farias, para tão humanitário fim, a importância de 505:996\$500. Com as últimas importâncias doadas, a quota para esse fim atinge a 568:834\$600.

**Descoberta arqueológica na Guatemala**

GUATEMALA, 10 (T. O.) — Os exploradores Dana e Ginger Lamb, de Sant'Ana, Califórnia, assistidos pelo prof. Franz Blom, do Instituto de Investigações Centro-Americanas da Universidade de Tulaha, descobriram o que deve ter sido uma grande cidade maya e que está situada entre Comitán, Agua Azul, e a fronteira com a Guatemala, entre os 16 graus e 45 minutos, latitude norte e 91 graus e 33 minutos, longitude oeste. Este achado arqueológico de indubitável importância não foi mencionado até agora pelos mayastas. Provavelmente as investigações serão agora continuadas sob os auspícios da Universidade de Tulaha.

# GABINETE DE INVESTIGAÇÕES

Identificações de estrangeiros

Estão sendo chamados os identificandos de números seguintes:

Dia 15 (hoje), das 7 às 9 horas, os de ns. 91.301 a 91.450;

Dia 16 (amanhã), das 7 às 9 horas, os de ns. 91.451 a 91.600;

Dia 17 (quinta-feira), das 7 às 9 horas, os de ns. 91.601 a 91.800;

Dia 18 (sexta-feira), das 7 às 9 horas, os de ns. 91.801 a 92.000;

Dia 19 (sábado), das 14 às 16 horas, os de ns. 92.001 a 92.200.

Nenhum problema humano pode ser resolvido sem agitação. Sem o toque de reunir. Sem preparação e sem comando. Não poderíamos acabar com o mocambo sem primeiro criar a revolta contra o mocambo. Revolta de cima para baixo e de baixo para cima, sobretudo do ambiente do mocambo e dos exploradores do mocambo. Essa preparação espiritual foi feita com intensidade noite e dia por todos os meios ao nosso alcance. Não esmorecemos em nenhum movimento. Não vacilamos em nenhuma hora. Não fizemos sequer uma pausa para descanso. Marchamos há dois anos sem parar. Foi essa agitação que nos permitiu organizar

# «Agitação»

o programa de larga envergadura que estamos realizando, atacando o problema do mocambo sob todos os aspectos. O tempo, nessa campanha, para nós é tudo. E' tudo como condição de vitória. Quanto mais realizarmos em pouco tempo mais ganharemos no sentido moral. No sentido moral convencendo, simplificando o problema e tornando patente a sua solução. Em dois anos fizemos tanto, que ninguém hoje, em Pernambuco,

tem que escondia sob a deformação de fatores geográficos os seus fins tendenciosos, sinão subversivos para descobri-los quando fosse tarde. Não há dúvida que a certas tendências da esquerda, tendências revolucionárias, nenhum fato social poderia ser mais propício do que o mocambo. Estamos eliminando uma célula de descontentamento. Estamos atenuando as distâncias sociais. Estamos eliminando os horrores. Estamos construindo nova ordem pela compreensão e pela solidariedade. A paz social só existe onde há respeito pela dignidade humana. Esse respeito é o motivo da nossa agitação. Agitação contra o mocambo".

Agamenon Margalhães

# Jogos preliminares de baseball realizados em Cambará

Em preparo ao Campeonato de Baseball do Norte do Paraná, realizaram-se no dia 29 de Junho os jogos eliminatórios da região de Cambará, com a participação de três "teams" locais: Agua de Coqueiro, Cambará e Vila Japonesa. A primeira partida que foi entre Cambará e Vila Japonesa,

desenvolveu-se bastante animada, terminando com a vitória de Cambará, pela contagem de 13 a 6. O segundo jogo em que se enfrentaram os defensores de Cambará e de Agua de Coqueiro terminou com uma facil vitória do primeiro.

# Os jornais do Rio estranham a atitude do governo uruguaio sobre a campanha hostil ao Brasil realizada naquele país por elementos extremistas

RIO, 11 — Os jornais cariocas, em sua unanimidade, inserem notas e comentários estranhando a atitude do governo da República do Uruguai, que, numa evidente quebra de solidariedade continental, vem permitindo a divulgação, na imprensa e na praça pública, de conceitos hostis ao Brasil. E verberam a complacência com que a administração do Presidente Baldomir encara a injustificada campanha, fomentada pelos elementos comunistas ali radicados e chefiada por um perigoso inimigo do Brasil, o agitador argentino Rodolfo Ghioldi, expulso do território brasileiro. Os comunistas platinos servem-se do pretexto da prisão de Luiz Carlos Prestes, pedindo a sua libertação e apontando-o como um herói nacional, querido pelo povo. Em nome da libertação de Prestes, duplamente condenado por crime político e delito comum, os mascarelos de Rodolfo Ghioldi, que chefiou aliás, a trágica intenção de 1935, tentam desacreditar o nosso país, em publicações injuriosas e insultos, nos "meetings" de rua. No momento em que o Bra-

sil dá seu integral apoio à proposta do chanceler Guani, — lembram os jornais cariocas — confirmando os laços de amizade e solidariedade que nos unem a todos os países continentais, surge essa campanha, permitida pelo governo do Presidente Baldomir e que foge a todas as regras pelas quais se tem regido, até hoje, as nossas relações com o Uruguai. Além de seu caráter lamentável, o movimento que se processa, no Uruguai, contra o nosso país, representa uma indêbita intromissão em assuntos que nos são, exclusivamente, pertinentes. Recordando a marçosa de 35, os jornais lembram que a atitude do Uruguai foi, nessa ocasião, da mais irrestrita solidariedade ao Brasil, rompendo relações diplomáticas com a U. R. S. S. ao verificar que o movimento fora inspirado e controlado pelo ministro russo em Montevidéu. A campanha, ora processada em Montevidéu, trai demasiado as suas origens nitidamente nascida da Terceira Internacional, precisa, — concluem os jornais, — para a preservação da dignidade brasileira, ter um paradeiro definitivo.

# Inesperada alta do algodão brasileiro

## Quais teriam sido as causas da elevação brusca do preço do "Ouro Branco"

Agora que não existe quase algodão nas mãos dos lavradores a notícia talvez não cause muita alegria aos plantadores do "ouro branco", mas o fato é que o preço desse produto que estava a 42\$ ou 45\$ subiu, no dia 11 do corrente, inesperadamente, 53000.

Os próprios negociantes do algodão foram surpreendidos por essa alta brusca. A causa da alta reside, segundo se acredita, na conservação do algodão norte-americano para o programa da defesa continental. Como que para confirmar essa orientação, a Inglaterra comprou 200 mil fardos e o Canadá 300 mil fardos.

Os entendidos atribuem, a alta à operação dos especuladores, que previram a elevação futura dos preços. Consta também que a propalada compra pelo governo, de algodão repercutiu na alta.

# Terrível seca assola a zona da alta mogiana, devastando quase que totalmente as plantações de café

## Minima a produção da rubiacea — A criação de gado e lavoura algodoeira também prejudicadas

A lavoura, principalmente a cafeeira, passa atualmente por um período verdadeiramente angustioso na zona da Alta Mogiana e Noroeste, em virtude da seca que durante 4 meses assolou aquelas regiões. Segundo consta, há mais de meio século que a zona de Ribeirão Preto, por exemplo, não sentia os efeitos tão avassaladores da estiagem, como os que vem sofrendo nestes últimos meses.

Acréscimo ainda que nos meses de Maio e Junho do corrente ano, a geada devastou imensas plantações. O lavrador desesperado vê levantar-se da terra

ávida de água, o pó que vai cobrir seus cafezais, inutilizando-os. A terra é fértil, a adubação feita com regularidade, mas sem as chuvas, os cafeeiros não podem sobreviver. Resulta daí que a produção do café, já em época de colheita é minima, não chegando sequer para cobrir as despesas. E, se esse estado de coisas se prolongar ainda por mais algum tempo, a produção do ano agrícola vindouro será nula. Nestas condições, um saco de café em coco não rende mais que 15 quilos de café benéfico, quando em épocas normais a média era de 20 quilos.

# A transpiração e a vida nos climas tropicais

## Um interessante estudo realizado no Japão

O dr. Nei Hisano, professor da Universidade de Nagoya comunicou o seu estudo sobre a transpiração, à sessão dos premiados da Academia Imperial de Ciências. O estudo veio esclarecer como as pessoas podem viver bem ou não, nos climas tórridos, de acordo com o grau de transpiração.

As pessoas que transpiram muito tem o coração fraco, e portanto não servem para os climas quentes. Numa mesma temperatura, a quantidade de transpiração varia do seguinte modo, conforme as raças: Japoneses, 2.500.000 a ..... 3.000.000 de gotas; coreanos 1.500.000 a 2.500.000 de gotas; ingleses, 3.400.000 a 4.700.000; norte-americanos, 3.500.000 a 4.800.000; filipinos 1.000.000 a 1.700.000; russos, 4.500.000 a 6.000.000 de gotas. Os japoneses são mais adequados aos climas quentes do que americanos, ingleses e russos, mas menos do que os coreanos e filipinos.

O dr. Hisano, por um acaso, observou que a colonização dos EE. UU. na África Ocidental e da Inglaterra na Índia, fracassou, do ponto de vista demográfico, pois a mortalidade atingia a 7 graus. Daí iniciou um estudo sistemático e, chegou a conclusão de que as pessoas que transpiram muito são pouco adequadas à vida nos climas quentes, e, contrariamente, as pessoas de pouca transpiração são perfeitamente adaptáveis a esses climas.

Este estudo serve para determinar os indivíduos que servem para a colonização nos climas quentes.

# Luta de longa duração

(Fatos diversos)

Há dias os indiciados Paulo Leite de Assis e Bento, envolvidos no processo referente ao roubo dos cinco mil contos de Banco do Brasil, requereram ao juiz da 1.a vara criminal, um exame médico, alegando que sofriam de moléstias que poderiam trazer dúvidas a respeito da responsabilidade criminal. Foram então nomeados peritos e os indiciados levados ao Manicômio Judiciário. Paulo de Assis seria examinado sobre moléstia mental e Bento sobre o seu estado geral de saúde. Vários dias os dois acusados ficaram em observações. Há dias chegou à primeira vara criminal, por intermédio da Secretaria da Justiça, o laudo dos peritos sr. André Teixeira Lima e Aderbal Tolosa. Trata-se de um trabalho metódico e completo.

Goto da Kaiko, no Hospital Santa Cruz, onde se internara para operar uma úlcera do estômago.

Vários dos seus colegas de firma, forneceram sangue para transfusão, mas isso nada adiantou.

O sr. Senjuro Hatanaka, visitou o "BRASIL ASAHÍ" no dia 12. S. s. regressou do Japão, pelo "Montevideu Maru". Pelo mesmo navio regressou também a sr. Fumiko Kitajima, esposa do sr. Koki Kitajima, farmacêutico-chefe do Hospital Santa Cruz.

O sr. Shungoro Wako está a caminho de regresso ao Brasil, pelo "Buenos Aires Maru", que chegará a Santos no dia 10 de Agosto p. vindouro.

# Um voador

15-VII-1941

Ouçamos Kan Sazan, — estudioso dos clássicos chineses, que viveu na provincia de Bingo, no século XVI —, contando um fato que ocorreu com a primeira máquina voadora inventada antes que ele existisse:

"Na cidade de Okayama, viveu um fabricante de papel chamado Kokiichi. Ele concebeu a ideia de voar pelo céu como um pássaro. Apanhou um pombo e fez as medidas de seu peso e de suas asas, calculando as suas proporções. Fabricou depois duas asas de papel, bastante largas, conforme as proporções achadas, capazes de sustentar um homem de sua altura e peso. Com dois cordeiros, que amarrou à extremidade de cada asa, abanava as asas para cima e para baixo. Após muitos insucessos, Kokiichi tentou voar do teto de sua casa, pois que era sempre incapaz de sair do chão, e, assim, pôde voar por perto de sua casa todos os dias. Um dia, Kokiichi se aventurou para mais longe do que usualmente, sobrevoando campos, quando viu um pique-nique que se realizava à distância. Prosseguiu no vôo e pensando que pudesse encontrar um amigo naquela reunião, aterrou. Os pobres piquineiros fugiram de medo, à vista do monstro voador, de modo que ele ficou com todos os refrescos. Para o seu grande espanto, porém, não pôde se elevar do chão, tendo que voltar para casa carregando a máquina às costas.

"O governador da provincia intímou Kokiichi a comparecer à sua repartição por causa de seu novo meio de voar no ar, e o deportou de sua provincia e confiscou a máquina, baseado em que era um crime à luz da lei da clausura e assustar a população, posto pudesse ser um prazer a ele, Kokiichi, o fazer o que outros não podiam".

E' do pequeno livro "Fude-no Susabi" (Crônica a pincel), de Kan Sazan. — M.

Há dias chegou a Buenos Aires o cargueiro "Awajiyama Maru", da Mitsui Bussan Line. Esse navio desloca 10.800 toneladas.

Buenos Aires, 11 (U. P.) — As autoridades do "Automóvel Club Argentino" fixaram para 10 de Agosto próximo a partida dos corredores que tomarão parte na disputa do "Grande Prêmio América do Sul", a ser realizado aos 16 de Setembro na capital venezuelana.

Os participantes da prova dirigiram-se ao por rodovia até Caracas. Na cidade de La Paz incorporaram-se ao caravana automobilística os competidores bolivianos e chilenos.

Na solenidade da entrega de "brevet" aos novos aviadores de Baurú, compareceu o sr. Salga do Filho, ministro da Aeronáutica. Cerca de 5.000 pessoas acorreram ao aeródromo.

RIO, 11 (A. N.) — Ontem à tarde, regressou de sua excursão ao interior do país o ministro da Aeronáutica, acompanhado de sua senhora.

Consta que a Casa Hase desta capital vai construir um prédio próprio de 80 contos de réis, no local do antigo Hotel Kyushu.

Faleceu nas primeiras horas de domingo último, o sr. Jutarô

# Publicações

## Les vitamines et le Brésil

**Kramer Laszlo**  
Imprensa Nacional Rio de Janeiro, 1941  
Recebemos e agradecemos o interessante estudo de Kramer Laszlo, grande vitamínologista húngaro, da Universidade de Budapeste, *Les Vitamines et le Brésil*. As vitaminas constituem a maior conquista científica dos últimos anos. O Japão tem estudos científicos de primeira ordem a esse respeito e tem procurado utilizá-lo praticamente. O Brasil, onde já houve um Osvaldo Cruz, é hoje um dos "leaders" do mundo nesses estudos. Transcrevemos com prazer o seguinte trecho de Kramer Laszlo, ajuntando que deve aparecer em breve uma tradução japonesa do seu livro. "O Brasil não carece de autoridades no domínio deste novo ramo da bioquímica e na ciência da Nutrição. "GILBERTO A. VILELA, e FRANKLIN DE MOURA CAMPOS, veem as suas pesquisas, das quais algumas definitivas, cuidadosamente registradas pela ciência estrangeira. Devo ajuntar aqui os nomes de CASTRO TEIXEIRA, A. PENNA DE AZEVEDO HELION POVOAS, PAULO ENEAS GALVAO, VICENTE BATISTA, DUTRA, JOSUE' DE CASTRO, a partir de 1930 deu ao nutricionalismo uma dezena de obras e de inúmeros muito importantes. Encontra-se atualmente, no Rio de Janeiro, um grande técnico em vitaminas, HILAIRE KOPROWSKI, da Universidade de Varsóvia, cujos estudos teóricos e práticos se completaram no "Instituto Lister" de Londres. KOPROWSKI, aos vinte e quatro anos, recebeu a distinção excepcional de ser nomeado membro da "Sociedade Bioquímica de Cambridge". Posse pesquisas muito interes-

Impressos ?  
Procure a tipografia  
**NIPPAK-SHA**  
C. Postal 375 — Tel. 7-3325

# A Estrada de Rodagem Pan-Americana

## Sua inauguração será realizada no ano vindouro

A Estrada de Rodagem Pan-Americana era um sonho dos países deste continente. Esperava-se a sua conclusão ainda este ano. Mas recentemente acredita-se que seja difícil.

O plano da construção da Rodovia Pan-Americana foi proposto no 5.º Congresso Pan-Americano, realizado em 1923 em Santiago do Chile.

A conclusão da grande rodovia, neste momento de grave perturbação mundial, demonstra o espírito de fraternidade existente entre as nações americanas. A longa estrada representa o ideal dos 21 países americanos.

Mesmo que não seja concluída este ano, a Rodovia Pan-Americana será inaugurada em 1942 quando se comemorará o 450.º aniversário do descobrimento da América. Será inaugurada solenemente no Dia da América, como aliás era do primitivo plano.

# Ataque à "quinta coluna" Um simulacro realizado em Anderson

ANDERSON, Carolina do Sul, 12 (U. P.) — Quatrocentos jovens estudantes que simulavam ser "turistas", armados com pistola, realizaram, ontem à noite, o primeiro simulacro de golpe de mão "à quinta-coluna".

Temporariamente os rapazes lograram assumir o controle da estação desta localidade de cerca de 20.000 habitantes. Os "conquistadores" rapidamente instalaram em seus postos aos "Quislings" locais, requisitaram os automóveis, carburantes, alimentos e outros materiais e, por fim, implantaram o uso de cartões de racionamento.

# Descoberta no Japão a cura da paralisia infantil

Depois de cinco anos de pacientes estudos, foi descoberta, no laboratório de Pediatría da Faculdade de Medicina de Osaka, a vacina preventiva para

paralisia infantil. Essa moléstia uma vez que se manifesta numa pessoa embora ela consiga salvar-se, um de seus membros fica completamente inutil-

# Novo recorde argentino de natação nos 800 metros

Buenos Aires, 11 (T. O.) — O notável nadador argentino José Mara Duradona, bateu, hoje, o recorde argentino dos 800 metros, de que já era detentor, registrando o tempo de 10 minutos, 21 segundos e 6 décimos.

lizado pela paralisia. A paralisia infantil é causada pela infiltração de vírus no corpo das crianças. É contagiosa e propaga-se rapidamente. O presidente Roosevelt também foi atacado por essa moléstia na sua infância e ainda hoje tem uma perna paralisada.

No citado laboratório de Pediatría de Osaka, foram iniciadas, há cinco anos investigações médicas sobre vibrações ultrasonoras e durante a experiência notou-se que essas vibrações intensíssimas produziam melhoras sensíveis nos organismos dos macacos atacados por paralisia.

Animados pelos êxitos, realizaram novas experiências, retirando soros do macaco curado por esse processo. Em seguida aplicaram o soro obtido, num macaco sadio.

Notou-se com grande surpresa que esses macacos não eram contagiados pela moléstia de Heimen mesmo quando injectados proposadamente os vírus em elevada escala.

Depois de repetidas experiências e acurados estudos foi conseguida pela primeira vez a extração da vacina preventiva contra a paralisia infantil, pela aplicação de vibrações ultrasonoras. A sensacional descoberta é digna do "Prêmio Nobel" e está chamando sérias atenções dos círculos médicos.

# Comércio interno e externo de São Paulo

**COMERCIO INTERNO E EXTERNO DE S. PAULO** — Quem se der à incumbência de manusear as fontes estatísticas estaduais, referentes à exportação bandeirante, verificará que, enquanto as nossas vendas aos outros Estados da Federação acusam uma linha ininterruptamente ascensional o mesmo não acontece às nossas vendas para o estrangeiro.

De fato, conquanto o poder aquisitivo dos brasileiros em geral seja ainda baixo e limitado, o que não se pode negar é que anualmente sobe o nosso movimento exportador para fora de nossas fronteiras. Mas, no campo de nossa exportação para o estrangeiro, e não obstante o ciclo policultor, em que ingressamos nos últimos tempos, o rendimento de nossa caudal exportadora tem-se caracterizado por avanços e recuos.

E' facil fazermos a demonstração do que vimos de afirmar.

O valor, por exemplo, de nossas remessas de produtos e de

1940	1.008.645 contos
1939	817.393 »
1938	697.080 »
1937	662.319 »
1936	631.327 »

No mesmo número de anos, como se materializaram em contos as nossas vendas ao exterior?

Responde este outro quadro:

1940	2.445.094 contos
1939	3.044.412 »
1938	2.775.861 »
1937	2.472.970 »
1936	2.589.894 »

mercadorias pelo nosso comércio de cabotagem exprimi-se desta maneira:

1940 . . . . . 1.008.645 contos

1939 . . . . . 817.393 »

1938 . . . . . 697.080 »

1937 . . . . . 662.319 »

1936 . . . . . 631.327 »

No mesmo número de anos, como se materializaram em contos as nossas vendas ao exterior?

Responde este outro quadro:

1940	2.445.094 contos
1939	3.044.412 »
1938	2.775.861 »
1937	2.472.970 »
1936	2.589.894 »

Ainda não dispomos de documentação estatística que nos permita aferir com justeza do valor de nossa exportação para outros Estados brasileiros, efetuada por vias terrestres.

Graças, porém aos estudos levados a efeito pelo Departamento Estadual de Estatística, esse intercambio se exprime em cifras

Rio Grd. do Sul	320.198 contos
Japão	242.488 »
Pernambuco	178.738 »
Canadá	95.357 »
Baía	130.551 »
Argentina	108.488 »
Ceará	77.514 »
França	81.589 »
Santa Catarina	42.961 »
Italia	35.953 »

O cotejo acima é deveras interessante. Inere-se do esposto que vendemos mais ao Rio G.

do Sul do que ao Japão. Muito mais a Pernambuco do que ao Canadá. Mais à Baía do que à Argentina. Ao Ceará quasi tanto quanto à França. Mais a Santa Catarina do que a Italia. E' verdade que, no caso desses dois últimos países, pode-se alegar que o nosso movimento exportador declinou, em virtude da guerra. Mas o que as estatísticas bandeirantes revelam é que, antes mesmo de irromper o conflito, a tendência era para certos mercados estaduais superarem quanto ao seu poder de consumo varios países do Velho Mundo.

Encontra-se, pois, o Brasil na fase definitiva da formação e da cristalização de seu "home market."

(Diário de S. Paulo — 1-4-1941)

## O nosso Potencial Hidraulico

O Brasil, como já ninguém ignora, é o quinto país do mundo em potencial hidraulico. Encontram-se acima dele, unicamente, o Congo Belga, a Rússia, o Congo Francês e a India.

Damos, a seguir, o potencial hidraulico em 1.000 H. P.:

Congo Belga	130.000
U. R. S. S.	78.000
Congo Francês	50.000
India	39.000
BRASIL	36.000

quinto lugar entre os países que possuem maior potencial hidraulico passamos para o décimo, entre os que têm maior número de H. P. A Suécia, por exemplo, possui uma miséria de potencial hidraulico: 4.000.000 de H. P. e, no entanto, já explorava antes da guerra atual, 1.874.000. A Italia dispõe unicamente de 5.400.000 H. P. e, no entanto, antes do tremendo conflito europeu já explorava 6.000.000.

Subscrevemos, ainda uma vez, a opinião de José Jobim. Podemos e devemos desenvolver a hidro-eletricidade, porque além de contarmos com um potencial prodigioso, somos donos de amplos depósitos de cobre, de fácil exploração. O aproveitamento, em escala cada vez maior, da nossa riqueza hidraulica, permitirá a eletrificação das nossas ferrovias, e eletrificação, como todo mundo sabe, significa transporte rápido, abundante e confortável.

Tal fato evidencia a saciedade a transcendência do mercado de consumo nacional ao futuro, à segurança e a estabilidade da economia paulista.

Abstraindo das trocas realizadas por estradas de ferro e de rodagem, e concentrando-nos apenas nos dados apurados no setor da cabotagem, vejamos como se processaram as nossas exportações para varias unidades da Federação e para diversos países estrangeiros, tambem no ano p. findo:

## Carvão e Gasolina

Num transcurso de três decênios, o Brasil importou 46.261.316 toneladas de carvão de pedra, coque e briquete, na importância de 3.808.533 contos. Parceladamente, os três decênios assim se fazem representar: 1911-1920, toneladas 14.627.253, valor 801.711 contos ou 55\$000 a tonelada; 1921-1930, toneladas 17.987.896, valor 1.295.099 contos 72\$000 a tonelada; 1931-1940, toneladas 13.646.162, valor 1.711.723 contos ou 125\$000 a tonelada.

Como se vê pela estatística, sem embargo de haver decréscimo de modo sensível a importação, houve grande aumento no valor, porquanto o custo da tonelada quasi duplicou. No mesmo período a importação de gasolina apresentou o seguinte movimento: 1911-1920, 201.306 toneladas; valor 99.736 contos; preço da tonelada 495\$444; 1921-1930, 1.566.807 toneladas; valor 897.663 contos; preço da tonelada, 572\$925; 1931-1940, 2.917.209 toneladas; valor, 1.325.232 contos; custo da tonelada, 454\$280.

## Enormes as quantias dispendidas pelos países dominados para manter os efetivos têutos-alojados em suas terras

Os países europeus sob o domínio dos teutos tem uma fabulosa despesa para a manutenção dos efetivos germânicos acampados em suas terras.

Entre esses países, a França é o que maior soma dispende para tal fim, gastando aproximadamente 9.000.000 de dólares por dia, alcançando desse modo essa despesa, no fim de um ano, o dobro do orçamento geral do governo francês, antes do advento da conflagração atual.

Temos depois da França a Holanda que gasta para a manutenção dos germânicos, 2.750.000 dólares diariamente. A seguir vem a Noruega, gastando até 15 de Dezembro passado, 480.000 dólares por dia, descendo a despesa para 316.000 dólares diários, em virtude da retirada de seu território, de uma parte das tropas teutas. A Dinamarca, seguindo a Noruega, dispende diariamente 289.250 dólares. Por fim aparece a Bélgica apresentando a despesa diária para manter os

germânicos de 140.000 dólares. Deve se salientar todavia que a Bélgica teve de pagar por duas vezes impostos especiais, elevando-se a primeira a 100 milhões de dólares e a segunda efetuada a 14-12-1940, a 84.750.000 dólares.

**Anuncios eficientes?**

Só no "BRASIL ASAHÍ", jornal de maior circulação na Colonia Niponica

Tel. 7-3326

# Tabela de preços para as feiras livres a vigorar de 11 a 17 de Julho de 1941

Arroz Agulha Amarelão, Extra	Quilo	25000
Arroz Agulha Amarelão, Especial (Lemos)	"	18000
Arroz Agulha Amarelão, Superior (Lemos)	"	18900
Arroz Agulha Amarelão 2.a (Lemos)	"	18300
Arroz Agulha Amarelão, Regular	"	15500 a 16000
Arroz Branco, Especial	"	15900
Arroz Branco, Superior	"	15700
Arroz Branco, Regular	"	15600
Arroz Catete, Especial	"	15700
Arroz Catete, Superior	"	16000
Arroz Catete, Bom	"	16100
Feijão, Mulatinho, Novo Extra	"	15100
Feijão Mulatinho, Novo, Superior	"	15000
Feijão Branco Graúdo Extra	"	25100
Feijão Branco Miúdo	"	15000
Feijão Preto, Extra (R. Grande)	"	15100
Feijão Preto, Floresta	"	15100
Feijão, Superior do Estado	"	800
Feijão Preto Colombina	"	15300
Feijão Manteiga, Novo, Superior	"	15400
Feijão Fradinho (Extra)	"	15100
Feijão Roxinho, Mineiro	"	15500
Feijão Roxinho, Paraná	"	15400
Feijão Chumbinho, Opaco (Mineiro)	"	14200
Feijão Chumbinho, Superior (Paraná)	"	15200
Feijão Bico de Ouro	"	15400
Feijão Canário, Superior	"	15400
Batata Holandesa, Lisa, Especial	"	15800
Batata Holandesa, Lisa, 1.a	"	15500
Batata Holandesa, Esp. (Olho Fundo)	"	15400 a 15600
Batata Hol., 1.a (Olho Fundo)	"	10300 a 14400
Batata Hol., 2.a (Olho Fundo)	"	15000 a 15100
Batata Hol., 3.a (Olho Fundo)	"	800
Batata Hol., 4.a (Olho Fundo)	"	500
Batata Alfinetada, Especial	"	15000
Batata Alfinetada, 1.a	"	800 a 900
Batata Alfinetada, 2.a	"	800
Batata Alfinetada, 3.a	"	500
Batata Canadá, Especial	"	15300
Batata Canadá, 1.a	"	15100
Batata Paraná, Irati, Especial	"	800 a 900
Batata Deformada	"	500
Farinha de Mandioca, Ext. Tor. (Norte)	"	15100 a 15200
Farinha de Mandioca, Ext. Crua (Norte)	"	590 a 15000
Farinha de Mandioca Comum Extra (Norte)	"	500
Farinha de Mandioca Boa (Rio Grande)	"	800 a 900
Farinha de Mandioca Comum (Rio Grande)	"	700
Cebola Argentina, Especial	"	35000 a 45000
Cebola Rio Grande, 1.a	"	45000 a 45200
Cebola Mineira, 1.a	"	35200 a 35500
Alho Chileno de 1.a	Cab.	300 a 400
Alho Chileno de 2.a	"	200 a 300
Abóbora Madura	Uma	500 a 1000
Aboborinha Brasileira	"	200 a 300
Aboborinha Italiana	"	200 a 400
Acelga Larga, Talo Branco	Maço	300 a 500
Agrião Vivaz	"	400 a 500
Aipo Salgão Branco c/2 cab.	"	500 a 700
Alface Sem Rival, 1.a	Pé	100 a 200
Alface Francesa	"	100 a 200
Alface Romana de 1.a	"	100 a 200
Alho Porro	"	200 a 300
Almôndico Folha Larga	Maço	200 a 300
Batata Doce	Quilo	400 a 500
Beringela Roxa Comprida	Dúzia	1500 a 3000
Beringela Giló	"	300 a 400
Beterraba, Vermelha c/8 cab.	Maço	500 a 800
Cebolinha Verde Comum	"	700 a 1100
Cenoura Comprida c/24 cabeças	"	600 a 1500
Catalonha	"	300 a 400
Cará da Terra	Quilo	600 a 700
Chicória Amarga	Maço	300 a 400
Chicória Crespa	"	300 a 400
Chicória Lisa	"	200 a 300
Couve Brocoli Verde (Maço Grande)	"	3000 a 4000
Couve Manteiga	"	300 a 400
Couve Flor, Pé Curto	Pé	400 a 1200
Ervilha Torta Verde	Quilo	15100 a 18000
Ervilha Branca de 1.a	"	15200 a 15700
Ervilha Branca Especial	"	15800 a 20000
Escarola	Maço	100 a 200
Espinafre Nova Zelândia	"	300 a 400
Erva Doce c/2 cabeças	Maço	600 a 800
Inhame	Quilo	600 a 700
Mandioca	Quilo	500 a 700
Mandiocinha	"	800 1500
Mostarda	Maço	200 a 300
Nabo Japonês c/6 cabeças	"	600 a 1000
Nabo Francês c/3 cabeças	"	400 a 600
Pepino Verde, Comprido	Um	300 a 600
Pimentão, Doce Grande	Dúzia	600 a 1500
Palmito Doce de 1.a	Um	2500 a 25400
Palmito Doce de 2.a	"	15200 a 15500
Palmito Doce de 3.a	"	800 a 1000
Repolho Crespo, Virtudes	"	600 a 15100
Repolho Lisa	"	300 a 500
Vagem Manteiga	Quilo	15200 a 25000
Vagem Rasteira	"	900 a 1500
Xuxu	Dúzia	1500 a 25700
Salsa Verde	Maço	200 a 300
Tomate, Redondo Vermelho, Especial	Quilo	15600 a 25000
Tomate, Redondo Vermelho, 1.a	"	15200 a 15600
Tomate, Redondo Vermelho, 2.a	"	800 a 15200
Tomate, Redondo Vermelho, 3.a	"	600 a 800

## Origem da Importação do Brasil

Oswaldo BENJAMIN DE AZEVEDO

(Continuação)

Era, entre os maiores fornecedores de "Manufaturas", o quarto, com mais de 180.000 contos. Nesta classe, obteve o 2.º lugar nas de "Louças, vidros e outros produtos minerais", e nas de "Fibras Vegetais"; e o 3.º lugar entre os maiores fornecedores de "Manufaturas de Peles e Couros", de "Ferro e Aço", de "Máquinas e Aparelhos elétricos e artigos eletrotécnicos", de "Máquinas e Aparelhos e utensílios para indústria", de "Veículos e Acessórios"; e o 4.º lugar nas de "Sais minerais, exclusive adubos", de "Produtos Químicos não classificados", e de "Produtos diversos, inclusive adubos químicos"; e o 5.º lugar nas de "Aparelhos, instrumentos e objetos físicos, químicos, matemáticos e óticos"; e o 6.º lugar nas manufaturas de algodão e o 7.º nas de lã; e o 8.º lugar nas de "Outras Máquinas e Aparelhos não classificados" e o 9.º lugar nas de "Papel".

Importava a França, tambem, dos Est. Unidos (11,5 por cento), Grã-Bretanha (7 por cento), Alemanha (6,9 por cento), Bélgica (6,9 por cento), e exportava para Bélgica (13,7 por cento), Grã-Bretanha (11,6 por cento), Suíça (6,3 por cento), Alemanha (6 por cento), e Estados Unidos (5,5 por cento).

O Brasil figurava com 1,6 por cento no total da importação e com 1 por cento no total da exportação da França.

Entre as importações francesas, a de gêneros alimentícios era a maior, com mais de 27 por cento do total. Bebidas (7,7 por cento), cereais (5,3 por cento), frutas (3,4 por cento) e café (2,8 por cento) constituíam a grande maioria. Em seguida a gêneros alimentícios, vinham os combustíveis (20,8 por cento) e têxteis (13,9 por cento), sendo que entre estes as fibras (12,2 por cento) predominavam. Metais (7 por cento), corpos graços (6,2 por cento), máquinas e veículos (5,3 por cento), couros e peles (3,7 por cento), produtos químicos (3,4 por cento) e papel (2 por cento), figuravam, depois daquelas, como os principais artigos das importações francesas.

A grande parte da exportação da França era constituída pelos produtos têxteis (19,9 por cento), entre os quais tecidos (9 por cento), fibras (6,7 por cento) e fios (3,9 por cento). Os metais tambem contribuíram com uma boa parte, 16,5 por cento do total, dos quais mais da metade cabia a ferro e aço. Vinha a seguir gêneros alimentícios (13,3 por cento), destacando-se neste grupo as bebidas, o açúcar, as frutas e os vegetais. Tambem exportava a França produtos químicos (9,8 por cento), máquinas e veículos (9 por cento) e couros e peles 4,1 por cento).

"Peles e Couros" (Matéria Prima), de lã (Matéria Prima), de "Manufaturas de Lã", de "Produtos Químicos Orgânicos" e de "Aparelhos de cirurgia, medicina, odontologia e veterinária"; em 4.º lugar nos fornecimentos de "Bebidas", "Frutas de Mesa", "Produtos diversos, inclusive Adubos Químicos", de "Aparelhos, instrumentos e objetos físicos, químicos, matemáticos e óticos", de "Armamentos e Munições"; em 5.º lugar no fornecimento de "Manufaturas em geral", em particular nos de "Manufaturas de Matérias Primas de Origem Animal", de "Peles e Couros (artigos manufaturados)", de "Aplicações de Papel", nos fornecimentos de "Manufaturas de Origem Mineral", de "Ferro e Aço" (Artigos manufaturados), de "Manufatura de Outros Metais de uso corrente", de (Algodão) (Manufatura), de "Matérias Plásticas" (artigos manufaturados), de "Obras de Cutelaria, ferramentas e utensílios diversos", de "Máquinas, Aparelhos e utensílios para as indústrias", e, finalmente, em 6.º lugar nos fornecimentos de "Papel" e de "Manufaturas de Fibras Vegetais".

(Continua)

## A FRANÇA TAMBEM FOI DOMINADA

Quinze dias após a queda da Bélgica a França tambem capitulou, ficando mais da metade de seu território sob o domínio direto da Alemanha. Ficou, porém, praticamente sob o controle total alemão, na parte que se refere às suas relações com o exterior.

Poderia a França ser um país relativamente independente do exterior em matéria de produção, se cultivasse tambem produtos sub-tropicais que ora importa por saírem mais em conta. A agricultura ainda mantém a preponderância, apesar do desenvolvimento de suas indústrias. Grande produtor de beterraba, de batatas e de cereais, entre estes o trigo e a aveia ocupam os primeiros lugares, seguidos da cevada e do centeio. Depois dos cereais, era a plantação de videiras a que ocupava a maior área das cultivadas. Além de nozes, produzia tambem grande variedade de frutas, tais como maçã, pera, ameixa, pêssago, damasco, cerejas, etc. Tambem a pecuária era desenvolvida, bem como a sericultura, a que o governo dava grande apoio.

Entre as matérias primas do gênero mineral, a produção de carvão e a de minério de ferro eram as principais, mas tambem possuía bauxita, pirita, sais de rocha, sais de potassa, lignito, etc. Quanto às indústrias a de metalurgia se destacava com sua grande produção de ferro puro, de aço e de alumínio. Vinha em seguida a de vinho, do açúcar refinado e a do álcool.

No intercambio dos países, as colônias francesas mantinham a liderança, vendendo à França mais de 27 por cento das suas importações, ao passo que adquiriam, tambem, mais de 27 por cento do total da exportação daquele país. A Algéria era a principal, figurando sozinha com mais de um terço do movimento comercial das colônias, e em 2.º lugar, depois da Bélgica, entre os maiores compradores, com 12,4 por cento do total.